

圏外のアンテナ

[けものみち]の巻

長年都内をウロチョロしている間に、得意な街とそうでない街ができています。

わたしの場合、後者の代表選手は池袋だ。土地勘がなく、いまだに「西武が東口で、東武が西口！」という、東京初心者専用の合言葉をつぶやきながら、駅の出口を探す始末である。

反対に、勝手を知っているのが銀座だ。最初に勤めた会社が、京橋サイドの銀座1丁目、転職した先が、新橋サイドの銀座8丁目。両端に詳しいので、すっかりわかったつもりになっている。

銀座は最近、プチプラ（低価格）ショップが増えて、6月末には老舗のデパート「松坂屋」が閉店した。

歩道を占拠する、中国人富裕層の甲高い声が天を突き、確かに、通りの雰囲気は一変したように見える。

だが、大通りだけが銀座なのではない。鉄の格子戸に施錠された路地こそ増えたが、カニ歩きでなければ通れないほど狭い、ビルとビルの隙間の裏路地は、まだまだ健在。人呼んで銀座の「けものみち」である。

プラスチックのビールケースに行く手を阻まれたり、太った猫のいる神社が現れたり、盛り塩が置かれていたりする空間の匂いはそのままである。

わたしがかつて通勤ルートにしていた裏道には、1件の喫茶店があった。毎朝立ちどまって、黒いガラス扉を鏡代わりにしたものである。

「鏡のうしろへ回ってみても、私はそこにいないのですよ。お嬢さん！」という詩は、朔太郎だったか。

考えてみれば、毎朝同じ時間に現れて、ガラス越しに百面相する女の姿は、この店の主人にしたら、災難だったことだろう。

昼なお暗い、けもの道を抜け出した時、通りは、とりわけ輝いて見える。

大通りだけを歩いている人は、きっとそのことに気づかない。



銀座の裏路地から通りを見る

= 2013年9月3日掲載 =